

1894(明治27)年4月、日本鉄道(後に国鉄東北本線)の古間木(現三沢)駅が開業した。幹線鉄道の登場は三沢村の流通事情を大きく変えた。以前は船で八戸を経由して全国に物資を運んでいたのだが、古間木駅から直接運送するようになったからだ。

この後、三本木町(現十和田市)の開拓や森林開発のため、三本木町と東北本線を結ぶ鉄道が主張された。当時は下田と三本木の路線も主張されていたが、結果的には1922(大正11)年9月、古間木と三本木の間に十和田鉄道が開通。二つの鉄道が交差する古間木は、駅前に繁華街が形成され、次第に交通の要衝となっていた。

1934(昭和9)年、古間木駅は白樺の丸太を使った駅舎に改築された。当時十和田湖を国立公園とする運動が盛んであり、古

間木駅が玄関口に位置づけられたからだ。そのため古間木駅は、白樺の駅として親しまれた。白樺の駅舎は古間木駅が三沢駅と改称し、駅自体が大改築された後も残された。外壁こそ改修されたが、今も青い森鉄道の観光施設「青い森たびシヨップ三沢」として使われている。駅舎裏側のホームに立つ柱が白樺風に作られており、当時の姿を留めている。青い森鉄道の三沢駅に降り立ったら確認された。

他方、十和田鉄道は1951(昭和26)年12月に十和田観光電鉄と改称。高度経済成長に伴う鉄道やバスの拡張と観光ブームに乗って、上北地域に鉄道やホテル業などを展開する一大企業となった。

二つの三沢駅

中園 裕

(県民生活文化課)

県史編さんグループ 主幹

まず、湖畔に十和田科学博物館を建設して学生会館を併置し、旅館太陽を買収して宿泊施設とした。続いて、近くに十和田湖バスターミナルを新設し、湖畔旅行の拠点に位置づけた。この後、野辺地町のまかど温泉や、むつ市大畑の葉研温泉に巨大なホテルを建設し、黒石市の虹の湖観光ホテルを買収した。

2012(平成24)年3月、十鉄は鉄道事業から撤退し、十鉄の鉄路は消えた。だが、今後は十鉄の遺産を地域作りに活かすことが問われている。旧十鉄三沢駅も遺産の一つだ。もちろん十鉄は民間企業であり、その遺産を県民が自由に扱えるわけではない。しかし、十鉄が公共交通機関の役割を担い、県民も利用客であった以上、廃線となる例があるからだ。



国鉄三沢駅と十鉄三沢駅 1963(昭和38)年5月26日・十和田観光電鉄所蔵。